

【シリーズ80年のあゆみ】

第3章 災害と支援

昭和11年11月1日、県内3番目の市として高山市が誕生しました。

80年にわたる高山市のあゆみを、広報たかやまではさまざまなテーマで振り返ります。

飛越地震

― 迅速な対応と広がる支援の輪 ―

幕末の安政5(1858)年、飛驒北部と越中(富山県)を地震が襲いました。飛越地震です。マグニチュード7の大地震で、飛驒では家屋700余りが損壊、死者は203人に及びました。各地で山は崩れ街道は不通になる大惨事でした。

折しも郡代は飛驒を離れており、陣屋では町や村の役人だけで危機管理にあたりました。まず速やかに村々の被害状況を把握し、被災者に救米を手配。生き残った村人も総出で道路などの応急修理に取りかかりました。また、比較的被害が少なかった高山町では有力町民から金銭や米、味噌、塩などの救援物資が差し出され、古川や国府からも郷藏の穀物や救援金が送られました。

迅速な対応と支援によって、震災後、一人の餓死者も出さなかったといわれています。

東日本大震災

― 一丸となって震災復興 ―

平成23年3月に起きた東日本大震災でも、飛越地震や阪神淡路大震災と同様、被災者の救済にあたる飛驒人の姿がありました。食品や生活用品などを被災地に送



続々と寄せられる救援物資



市内小中学生が一丸となって集めた義援金



各所で街頭募金を呼びかける姿がありました

東日本大震災の被災地を支援する市民の姿(写真)は、150年前の飛越地震と変わりありません。

災害・防災の主な歴史

- 昭和14年 高山消防組を高山市警防団に変更
- 昭和28年 高山消防署設置
- 昭和34年 伊勢湾台風
- 昭和37年 焼岳噴火
- 昭和40年 高山消防署庁舎完成
- 昭和47年 飛驒消防組合発足
- 昭和49年 宮川防災ダム完成
- 昭和50年 久々野防災ダム完成
- 昭和54年 洞谷災害



豪雨で土石流が発生。栃尾温泉街に流れ込んだ(㊤洞谷一帯、㊦発生直後の様子)



宮川防災ダムが無かったところの一之宮町の水害(伊勢湾台風)



噴火した焼岳

昭和56年

56豪雪



56豪雪時、市内の積雪累計は7mを越えた(㊤上三之町、㊦ラッセル車)



豪雪で倒壊した荘川中学校体育館

- 平成2年 大島町林野火災
- 平成6年 飛驒消防組合庁舎(移転)完成
- 平成7年 緊急救命士制度発足
- 平成11年 阪神淡路大震災に消防職員派遣
- 平成11年 越前市、富山市、松本市、平塚市、小松市。以後、篠山市、蒲郡市、大野消防署、丹生川分遣所業務開始(以後、荘川・清見・白川)